

①信仰者は災いに遭う？ その理由は？

まさに「一難去ってまた一難、七転び八起き」といった言葉が思い浮かぶほど、色々なことが起こるヨセフです。「主がヨセフと共におられたので」(2)、災いが幸いに変えられたのだと思ったら、それがまた次の災い（主人の妻の誘惑）を呼び起こしました。信仰者は「その信仰のゆえに災いに遭わない」のではなく、「その信仰のゆえに災いに遭う」のかと思わされます。どういうことでしょうか？

②神様を知る者の「罪理解」、ここにあり！

主人の妻の誘惑に対するヨセフの答え、「主人は私に全てを委ねて下さった。よって私が一番上。しかしその主人のものは別。それに手を出すことはできない」(8-9)を読むと、エデンの園の神様と人間の関係を思い起こします（創世記 2:15-17）。最後の「私は、どうしてそのように大きな悪を働いて、神に罪を犯すことができましょう」(9)という言葉から、ヨセフも神様を考えていることが分かります。悪と罪は、十戒を与えて（出エジプト記 20 章）何が罪かを知らせ給うた神様を覚えて生きるときに、初めて真剣な問題となるのです。

③主人の妻は誰かに似ている。そう！ エデンの園の蛇と人間！

このヨセフと対象的な人物が主人の妻です。ヨセフを罪に誘惑し、平気で嘘をつき、ヨセフに罪の責任を押し付けます(14-18)。エデンの園の蛇のようであり、また罪の責任を女や蛇に押し付けるアダムとエバのよう（創世記 3:12-13）、すなわち、私たち自身の姿でもあるのです！ では、ヨセフは誰に近いのか？ 憎まれ、蔑まれ、無実の罪で十字架にかけられても、黙ってその「私たちの罪」を一身に負って下さったイエス様でしょう！

④目先の損得に一喜一憂せず、災いも恐れなくなる生き方！

ヨセフは神様の目に正しい道を貫きます。目先の損得や幸不幸を考えて策略を練ったり、訪れた状態に一喜一憂しないのです。そのヨセフに神様が用意して下さっていたものは破格の恵みでした！ 私たちもヨセフとイエス様に倣って神様への信頼に堅く立ち、何によっても揺らがない信仰を身に着きたいものです！